

## 知覚と行動主義学習理論 —— オルポートの知覚諸学説批判と構造学説 (10) ——

筑波大学心理学系 金子 隆芳

Perception and theories of learning : A synopsis of Allport's critique on theories of perception.

Takayoshi Kaneko (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*)

A critical review of a chapter on perception and theories of learning from F. H. Allport's *Theories of perception and the concept of structure* (1955) is presented. Tolmanian cognitive theory or S-S theory does not contradict perceptual theories in the sense that S-S theory itself is a theory of perception. On the other hand, Hullian S-R theory is considered a threat to perception theory when Solomon-Howes attacks the directive state theory of word cognition with the frequency principle of S-R linkage. Allport admits that many aspects of perceptual phenomena could be replaced by S-R terms and that the traditional theory of perception should be remodeled to include a theory of behavioral aggregates. At the same time, phenomenological methodology is still valid for perceptual study and the mentalistic description of innate events should prove to be of value to perceptual psychologists. The hypothetical construct of intervening variables is criticized as fictitious and devoid of denotability.

Key words : F. H. Allport, theories of perception, theories of learning, directive state theory, word cognition

### 知覚理論における分析主義と全体的体制論

科学の世界でもドラマは繰り返される。実験心理学のはじめ心的現象の内観分析法が登場し、知覚理論の基本問題“why things appear as they do?”に答えるのに、分析主義的意識要素を措いては考えられなかった。しかしそれも束の間、まもなく全体的体制論が要素論にとってかわる。全体性、関係性、超加算性なしに心的現象はもはや語れず、何が構造化されるのかではなくて、構造それ自体が精神の本質となった。「場」の概念も重要である。

しかし科学は分析的概念なくしてはやはり成り立たない。強度とかエネルギー、あるいは連合の強さとかいうものの加算性は認めなければならないし、超加算性の名において物理的法則や測定的方法を罷免することはできない。ここには明らかに相容れない二つの観点が対立している。

知覚の全体的体制論は感覚系に対する運動系の側面を忘れていたといわれる。なるほどゲシュタルト説や場の理論は運動系や学習行動を論じない。その中で Werner と Wapner の感覚・筋緊張系の場の理論は知覚現象における運動系要素の重要性を示したが、感覚と運動といったようなかけ離れた要因がどこでどう結び付くのか、なお問題が残る。

指向状態説は知覚理論史のなかで最もドラマチック

と思われる出来事である。精神物理的測定の対象になるようなディメンジョン知覚は本来 autochthonous であるべきであった。ところが情動、価値、欲求のような内的条件が、物理的世界の見えかたを変容させるのである。長さといったような最も安定した量的知覚ですら変わるのである。ここには感覚データを事前選択する機能主義的前知覚者の亡霊再びあらわれるの感があった。悪くすれば不動たるべき刺激・感覚の精神物理学は一夜の幻想と化し、よくとも確実性において失墜せざるをえなかった。ただ幸いにして前知覚者論には論理的矛盾がある。これを克服するための仮説理論やセット・ダイナミクス論についてはまさに見てきたとおりである(文献欄参照)。

分析主義と体制論の対立がこのまま続けば知覚理論は分裂である。ところがここにさらに割り込んでくるのが学習理論である。知覚と学習はそれぞれの領域で自己主張をしてきたのであるが、それが通用しなくなるのも早晚のことである。事実、よほど純粋な生得主義者、ゲシュタルティスト、場理論家でもなければ、学習やもしくは過去経験なしに知覚を語ることはできない。少なくともその発生に目を向けるならば知覚理論は学習要因を避けて通ることはできなくなった。

### 学習の刺激反応理論と記号ゲシュタルト理論

知覚理論におけると同様に、学習理論にも二つの流れがある。Hilgardによれば連合理論と場理論であり、SpenceによればS-R説とS-S説である。

前者の代表にHullの理論がある。すなわち強化(欲求解消)試行の反復によるS-R結合または習慣強度の連続的増加関数を基本的な仮定とし、そのパラメーターとして欲求強度、刺激強度、報酬量、抑制ポテンシャル、刺激般化、オシレーションなどがある。実効反応ポテンシャルは反応ポテンシャルから抑制ポテンシャルをひいたものであり、これが一定閾値をこえると反応が起こる。反応は振幅、潜時、消去抵抗、生起確率などにより測定される。

S-R連鎖の中間にいろいろな媒介変数が仮定される。たとえば習慣強度、反応ポテンシャル、抑制ポテンシャル、ドライブなどがそうである。これらはいずれも外的に観察測定可能な変数と結合されるということで正当化される。かくしてすべて測定可能な諸変数が、仮説と実験事実の交錯する中で、関数、方程式、あるいは曲線グラフとして表現される。その本質においてHullの理論は定量的である。学習がbit-by-bitの漸増的、連続的過程としてとらえられる。

S-S理論または場理論は、Tolmanの記号ゲシュタルト期待理論を例にとることができる。Hull理論が条件反応論理としてPavlov, Thorndike, Watsonから来るのにたいして、場理論はゲシュタルト説やLewinの位相の場由来する。目標とか場の平衡などが主たる概念となり、刺激や反応とはもはや言わない。感覚要素は反応とリンクするのではなく、他の感覚要素と一つのパターンや場の構造に統合される。

認知という概念はこの種のシステムによくでてる用語であり、したがって目印でもある。生体が学習するのは目標に達するための経路ないしは手段に関する知識である。方法-目的の関係が知覚され、認知され、記憶される。Tolmanによれば、対象の認知は目標に対する一定の関係を期待させる記号(サイン)としてである。Tolmanにおいてカセクシスというのは最終目標と要求満足との関係認知のことであり、equivalence beliefというのは最終目標にいたる下位目標認知のことである。またfield expectancyというのは目標の存在を期待させる事象系列や関係系のことで、場所学習や認知地図の形成などはこれに関するものである。期待は仮説でもあり、目標達成により確認され、学習される。このような記号ゲシュタルト説からいえることは、認知期待

は容易かつ広汎にトランスファーが可能だということ、たとえば一つの経路がブロックされても、簡単に代替経路をとることができる。また潜在学習が証明するように、期待学習にとって動機づけは必要ない。したがって強化も効果の法則もない。動機づけは学習成果の実行の条件であるにすぎない。

しかしTolmanのカセクシス概念にもみられるように、欲求にともなう指向状態的緊張は学習における一般的条件として介入してくるものである。そのような指向状態は欲求満足対象に対する第一次デマンドのこともあり、そのための手段としての対象に対するように第二次的のこともある。第二次デマンドはその対象を道具的に認知することである。

デマンドとか、カセクシスや期待はTolman説における媒介変数であるが、それはHull理論におけるように観察可能な変数にもとづくものではない。方程式もない、つまり量的法則になっていない。理論の性質上、それは難しい。たとえば学習過程は突然の不連続過程である。試行ごとの漸増というものが無い。たしかに物事の関係というものは突如として理解されるものである。

Hull理論もTolman理論も、多くの実験的研究によって支持されてきた。どちらも行動主義的であり、かつ巨視的である。とくにTolmanの場合はその概念規定においてnon-denotativeであり、ときには目的論的である。それに比べればHullにおいてはその巨視性は程度が低い。たとえば求心性神経交互作用といったときは、定量化されえない概念の、しかも微視的表現である。

### 知覚と学習理論

HullとTolmanの理論が両立しないことは明らかである。確かにある現象は刺激反応理論がよく、ある現象は認知理論がよい。知覚理論との関係にも両者は異なるものがある。認知や期待の理論タイプはゲシュタルト説と近縁関係にあり、ゲシュタルト説は本来が知覚理論であったから、これは知覚理論に似たところが多い。場理論も同様である。Tolmanにおける認知的レディネスは知覚のセットに似たものである。これはBruner-Postmanの仮説理論、指向状態説、心理物理的知覚判断などのほか、社会心理学にも登場する。

そういう訳であるから、Tolman型理論に関する限り知覚理論家はこれを恐れることはない。知覚は学習自体の不可欠の側面である。Learning is perceptionである。学習理論が部分的には知覚理論に他ならないのである。

刺激複合によって生ずる神経活動はつねに体制的

である。Lashley もそのように言うしゲタルト説もこれを原則とする。したがってたとえば刺激弁別実験においても、反応を規定するのは個別の刺激ではなくて、「関係」である。刺激般化も行動的には習慣強度の勾配と見なされるが、Lashley によればそれは連続体上の弁別刺激にたいする感覚的な閾の問題である。また Razran によれば、般化曲線は連続体上スムーズではなく、被験者は範ちゅう的ないし段階的な評定尺度を適用しているかのごとくで、これは行動的学習というよりは知覚判断の問題といてよい。

Brogden の preconditioning というのは、あらかじめ刺激 A と刺激 B とを連合呈示し、ついで刺激 B をなんらかの反応に条件づけると、刺激 A もまた条件刺激になるというものである。Hilgard はこれを媒介的知覚反応によって説明した。Birch & Bitterman は Hull の理論では説明のできない刺激等価の例をいろいろあげ、学習における感覚統合過程の重要性を指摘した。Woodworth も学習における知覚擁護論者である。条件反応実験においてまず強化されるのは知覚であり、弁別実験においても、刺激対象が弁別されるのであって、運動反応の分化ではない。条件づけ実験は新しい知覚の形成であるといった。

さて、学習の認知理論と知覚理論にはこのように親近性があるのに対して、刺激反応理論にはおよそ知覚論のつけ入る余地がない。意味、関係性の知覚、認知といったような用語はない。現象論は勿論ないし場の概念もない。知覚的パターンは弁別反応の習慣強度に還元される。被験体がなにを考えているのか、世界がどのように知覚され認知されているのか、には一切拘わらない。被験者の言語報告も一つの反応で、行動の分化を必要とする特定の場面に対する調節機能に他ならない。

S-R 理論家にとっては知覚の強化、感覚過程の統合、関係知覚といったようなことには関心がない。彼等にとっては一定の対象に対する一定の反応傾向（言語反応もふくめて）の獲得が問題である。知覚的習慣形成も学習の連続的強化の法則にしたがうと考える。彼等にとっては「学習は知覚である」ではなくて、「知覚も（連合）学習だ」ということである。もともと彼等は知覚理論を知覚理論として発展させる気はない。むしろこれを自分の理論体系のなかに引き込もうとする。事実、Hull の刺激反応理論は学習にとどまらず、行動の全体系に及ぼうとするもので、当然、知覚現象も含まれてくる。以下はそのような方向づけをたどってみようとするものである。

### 知覚の刺激反応理論的解釈：特に仮説理論との関係

心理物理学におけるような単純な知覚は刺激反応の用語に翻訳することは易しい。心理物理的実験は刺激に対する弁別反応に関するもので、教示によって明るさとか重さとかのような特定の刺激連続体上に反応を拘束する。心理物理的曲線はこの特定の反応と特定の連続体上の刺激との関数関係を表す。その関数のパラメーターのあるものを一定にして他の変数と反応との関係をみたり、あるいは反応を一定に保って変数間の関係をみることができる。

やや複雑な刺激複合になるとゲタルト性が問題になる。これについて刺激反応論的にいえば Hull は求心性神経交互作用なるものを言っている。刺激の神経過程の交互作用によって般化連続体上の移調のような効果がおこる。知覚疲労については反応抑制を対応させることができる。これは反応にともなって発生する内的抑制過程のことである。

メンタル・イメージについてはどうであろうか。これに対応するのは Hull の部分的目標期待反応である。これは被験体が迷路走行において目標に達しないうちに、つまり目標刺激がなくても、唾を飲み込むなどの反応を示すことである。この部分的反応が自己受容性の刺激を生み、それがつぎの反応につながっていく。

このような「外的刺激-部分的期待反応-自己受容性刺激-顕現反応」の系列においてみると、外的刺激に対する反応としての知覚は刺激と反応を結ぶ媒介変数である。

この内的知覚反応にも実効反応ポテンシャルの変動を考えることができる。それが注意に対応する。Hull における実効反応ポテンシャルは、習慣強度、刺激強度、ドライブ、抑制ポテンシャルなどによりきまり、かつ絶えずオシレートするものとされているが、注意もまさにそうである。特定の刺激対象に特に注意を払えばその反応ポテンシャルも高く、生起確率、反応振幅、消去抵抗も高い。これはまさに知覚セットの本質でもある。

このようにして知覚は刺激反応の論理的枠組みでかなりの程度に解釈できるように思われる。そこですでに定式化された知覚理論についてもっと具体的に刺激反応に翻訳することを検討してみる必要がある。それには仮説理論が適当であると思われる。

仮説は他ならぬ刺激反応結合あるいは習慣である。刺激情報はそれまでの学習過程において知覚反応誘発の条件刺激であったと同時に、現在まさにその知覚の誘発刺激である。仮説強度は習慣強度ない

しは実効反応ポテンシャルである。そうして仮説のコンファメーション、つまり知覚達成は、刺激反応理論でいえば、反応が実際に起こることである。知覚実験でいえば、呈示された刺激に対する弁別反応として被験者が刺激語を読んだり、何かしるべき反応をすることである。もし知覚欲求というものがある、それが知覚反応で解消されるというのであれば、仮説コンファメーションはひとつの強化過程である。強化試行数は刺激反応論の主要変数であるが、コンファメーションの回数とその意味での強化試行数になる。

S-R 理論においてドライブは強化の背景条件であり、かつ反応ポテンシャルの主変数であるが、それと同様に動機づけは仮説を強める。S-R 理論は表向きは認知的要因について言わないが、求心性神経交互作用や部分的目標期待反応、あるいは第2次強化などがまさにこの種の対応概念であることは、すでに考察したとおりである。

代替仮説がいろいろあるという状況はいろいろのS-R 結合があるということであるが、どの反応が起こるかというのは、反応ポテンシャルでできる。Bruner-Postman のモノポリーの原理はこれに対応する。

このように Hull の理論と仮説理論とを対応させていくことができる。さらに続ければ、刺激対象の non-veridical な知覚とは刺激反応論でいえば刺激一般化である。たとえば surmise という語が surprise というように聞こえたりすることである。このように刺激反応理論は現象学や意味論によらずして知覚の誤りを説明する。知覚の仮説理論は反応傾向の強さを測定するのに認知時間閾を使用するが、これは刺激反応理論が反応誘発傾向を測定するのに使用するのと同じであるということも指摘しておこう。

### 語の「価値と認知閾」仮説に対する Solomon-Howes の批判について

刺激反応説と仮説理論とに以上のような対応がづくにしても、仮説理論の実験的事実を何処まで刺激反応で説明できるであろうか。ここにとりあげるのは語の認知時間閾に関する Postman-Bruner-McGinnies と Solomon-Howes との論争である。周知のように Postman らは語の知覚における選択的要因として語の個人的価値を主張した。それに対して Solomon-Howes は語の認知時間閾の低下はその語を使用する頻度の関数であるとしたのである。つまりそれまでの試行数に依存した S-R 結合の強度という以上のものではない。しかも不思議なことに従来の知覚理論はこのように変数について何の解釈も

あたえて来なかった。

Solomon-Howes は語の頻度として Lorge Magazine Count と Lorge Thorndike Semantic Count を使用し、Postman-Bruner-McGinnies の実験を追試した。注意すべきは Solomon-Howes は知覚心理学が陥りがちな概念の主観的使用を客観主義の立場から極力避けていることである。たとえば seeing, distorting, selecting といったような用語は主観的で不確実である。それがあい昧かついわゆる ad hoc な説明の原因となる。知覚もまた操作的に特定可能な刺激と反応によって定義されなくてはならない。そこで Solomon-Howes は刺激に関しては頻度を一つの変数とし、反応に関しては認知時間閾をとった。それは the duration for which the printed form of word must be exposed in a tachistoscope under a given set of instructions before a subject will emit that word ということで、ここには seeing という用語はひとつもない。

学習の刺激反応連合説を Solomon-Howes の実験に厳密な意味で適用するためには二つの仮定が必要である。一つは Lorge Magazine Count のような変数を実際にその被験者のその語の使用頻度としてみなすこと、もう一つは日常その語に対する反応として、声に出すにしても出さないにしても、人は構音反応を行っているということである。

第一の問題については、たしかに任意の被験者についていつもそうであるという証拠は無い。そこで Solomon-Howes はトルコ語のような被験者の知らない語を使用し、その呈示回数を実験的に操作して同様な実験を行い、自説を検証した。

認知時間閾が果たして習慣強度の適切なメジャーたりうるか、ということも問題である。また Solomon-Howes も言うように使用頻度だけが認知時間閾の決定因であるというわけでもないし、知覚における行動的側面を強調しすぎるのも疑問であるが、少なくとも語の知覚について、これを反応頻度の関数として取り扱うことの、いわば塞は投げられたのである。仮に情動的要因が一つの決定因でありうるにしても、そのような要因自体がまたその個人の生活史における使用頻度を反映すると考えられるのである。

Solomon-Howes の実験は慎重であり、その議論は説得的である。伝統的知覚研究は知覚を「それ自体において」研究し、その問題意識は how the world appears to the individual にあるのであるが、いまやこの伝統が脅かされている。何より行動主義は操作的基準において優れている。行動主義の知覚現象への侵入はいまのところ言語行動にかぎられて

いるとはいうものの、知覚実験における被験者の報告が、所詮、言語反応であることを思えば、行動主義はますますこれを侵害していくのかも知れない。

ある町のお祭りで明日は風船レースがある。青の風船（伝統的知覚論）と赤の風船（行動主義）がレースに備えてセットされていたのに、夜中に二人のいたずら小僧が来て青い風船を全部飛ばしてしまった。朝、みんなが来たら全部赤い風船だけだった。Solomon-Howes がそのいたずら小僧だとはいわないが、彼等の冗談の一つ一つが知覚研究者の栄えある現象学に強い緊張を引き起こすに十分であった。それは Postman-Bruner-McGinnies の知覚の価値理論を破壊しただけではない。この異端者はさらに矛先を転じてパーソナリティ理論をも狙っている。

以上はやや誇張が過ぎたかもしれないが、公平にみて Solomon-Howes は知覚研究者に一つの反応を起こしたことは確かである。たとえば Postman-Schneider は、刺激反応図式を無理やりに一般化しなくても、知覚なら知覚という限定的領域においてのみ法則をもとめることはなお価値のあることであると反論した。もともと知覚反応と他の反応とはひとつの違がある。知覚の歴史は長く豊かであり、知覚研究者は知覚研究の知覚研究たる所以について相互了解を持っている。たとえば Postman-Schneider は知覚研究の特異性として「構え」set の概念にたちもどっている。確かに知覚反応を知覚反応たらしめるものに対象や事象に対する被験者の選択的構えがある。これらの要因の変化によって起こる反応の変化は知覚反応であり、その法則性が知覚の法則である。指向状態的要因や刺激要因が反応確率の条件としてのみ取り扱われるような刺激反応図式に知覚研究が吸収されてしまうこと、結果として知覚の概念自体や知覚体制といった概念が消え失せてしまうことに Postman-Schneider は反対である。知覚反応の変数のあるものが刺激反応理論で説明できるとしても、それは真に知覚的な何かについてまだ十分の余地を残すものである。知覚実験における被験者の反応は、真に知覚的な何かと言語反応レポートとの相互の産物である。

Adams-Brown はもっと強い調子である。彼等は知覚といったようなメンタリスティックな概念を刺激反応特性や客観的操作性によって定義しようとすることに反対である。たとえば残像について語るときに、「残像」というようなメンタリスティックな用語によってものを考えることは心理学者にとっていつかは報われることであると信じている。彼等は操作主義 (operationism) を表わすのに “O” としかかかない。彼等としてはそれは nothing だ、得る

ところはゼロだといいたいのである。

このような熱意あるディフェンスにもかかわらず、語の頻度が知覚反応の一つの決定因であるという刺激反応論的命題はやはり確実のように思われる。Postman 自身も Solomon と組んで、Thorndike-Lorge Count のような一般的指数ではなく、人工語（実際にはトルコ語）を使用して、その呈示回数を実験的に統制して同様の実験をして、やはり同じ結果を得た。つまり言語刺激とその語の reading または saying の反応との連合を証するものであった。したがって語の知覚はやはり学習の一般の領域に属するもの、この実験に関する限りそれ以外の別のものとして考える必要はなかった。

### 知覚理論と刺激反応理論は統合できるか

言語刺激と言語反応の結合として語の視知覚が説明され、伝統的現象学はいまや排除されようとしている。知覚法則も学習の法則と変わることはなく、知覚理論もいづれは学習理論の方向にリモデルされるのではないか。それはあり得ないことではない。

Solomon-Postman によれば、いまのところ彼等が分析の対象としている学習過程は、これを S-R 結合としても S-S 型としても大差はない。また語の頻度の効果をベースとしながらも、そこから情動的、価値的ないしは欲求関連変数（つまりは指向状態仮説）に論及することもできないことではない。どう考えてもよい。

Solomon-Postman は語の認知における競合的反応を刺激般化で説明した。低頻度語に対する高頻度語の干渉によって、高頻度語への反応傾向が生ずるのである。強い仮説とか弱い仮説とかいう知覚論的概念は連合強度の高低に置き換えられている。しかし彼等において行動主義が必ずしも徹底しているわけではない。たとえば有効刺激量の増加によって競合仮説の範囲が狭められたと考えてもよいし、刺激般化が狭くなったと考えてもよい。それは読者の自由である。ここには刺激反応理論の優勢ななかにも仮説やセットが知覚理解の有効な概念としてなお命脈を保っている。しかし同じ論文のなかで同一の現象に対する二人の著者の見解が対照的であるのも奇妙である。

これはお互いの立場や気性に寛容であるかのごとくであり、あるいは “live and let live” の共存精神のごとくでもある。しかしそういうことは日常生活の美德ではあっても、科学における経済原則にはそぐわない。対立する理論の共存はやはり困ったことである。しかし当の Solomon-Postman はあまり困っていないようである。むしろこれをよい兆候と考え

ている。

彼等が認知閾決定という知覚実験本来の操作を行い、これを言語反応学習として解釈するのはそれはそれでよろしい。しかし彼等が言うように、このことが知覚理論と言語学習の和解のための一つの方略であるとか、理論的橋渡しであるとかいうことに、そんなに楽観的でいられるであろうか。確かに仮説理論と刺激反応説との間には既に述べたような平行関係がなくはない。しかし両者の本質的概念や方法論がほとんど別々の論述世界を構成している事実を考えれば、どれほどの和解が可能であろうか。

例えば仮説とそのコンファーマイション、セット集合体の生理学的対応、刺激入力とそのエネルギー的閾値達成といったような概念は、どう考えても刺激反応結合と対応した処はない。また刺激情報のコンファーマイションという作用は刺激と反応誘発とはほど遠い。認知閾における知覚の出現が悉無的であることが反応誘発とも類似しており、また仮説強度が習慣強度と同じように次第に強化される性質のものであるにしても、それが刺激反応結合強化と同じであるとは殆ど思われぬ。刺激反応が開放的線形連鎖であるのに対して仮説とはもともとパターンないしは構造的フォーマットである。古い言い方ではあるが *cognition is still cognition and S-R linkage is still S-R linkage* であり、この情況はやはり当分変わることはない。仮説理論の基本はセットの概念にあるが、セットは学習と同じではない。セットは学習の条件を決めるものではあっても、学習それ自体ではない。

このようにみえてくれば、知覚理論の諸概念が巨視的連合的学習理論とどんなに違うかがわかっていうものである。いわく現象学、精神物理同型説、刺激複合とその大脳パターン、コンテクスト、コンフィギュレーション、大脳皮質とトポロジカル・フィールド、有機的状態、緊張パターン、位相連鎖、内的指向性、仮説、等々。これらの概念が刺激と反応の測定変数や Hull における量的な媒介変数連鎖などと何の関係があらうというのであろうか。

科学一般において、われわれは二つの対立理論というものにいつも悩まされている。しかも皮肉なことにそれぞれがより完全であればあるほど、*"two are one too many"* と感ずるのである。知覚理論と刺激反応理論の平行関係あるいはなんらかの共通点への収束は、できれば勿論よいことには違いない。

すべてこれらのことは伝統的知覚理論にとってなにを意味するのであろうか。知覚の問題がいまや拡張されてきたことは否定できない。もはや学習と切り放しては考えられない。知覚と呼ぶアグリゲート

は *"aggregate of behavior"* となりつつある。それは時間と試行の関数として発達し強化される一つの生理学的過程である。知覚はあくまでも知覚だとか、知覚も結局は学習的オペレーションだとかいうかわりに、知覚と学習は一つの事実の二つの見方だというべきかもしれない。

あらゆる心理学理論は究極的には一つの統合的アグリゲート、すなわち *the behavior of the organism* にかかわるものである。あるいは、ひとつの基本的アグリゲートがあるだけだが、その異なる側面について異なる理論がある、ということもできる。各々、その作用をみる時間幅や位相が違うということもできる。あるいは一方は空間的側面を、他方は時間的側面を見ているといってもよい。一方はパターンの非定量的なものを、他方は量的な共変関係を強調する。

もしこれが真実ならば自然は本来整合的であるべきであるから、これらの理論がなぜ一つの調和点に一致しないのかということがむしろ問題である。現代心理学のこの偉大なる競合理論を統合に導くためにはせめて同じ言語を話さなければならない。相互の概念に翻訳したり概念を寄せ集めたりするのではなくて、共通概念を開発しなければならない。仮に一義的な解が有り得るとするならば、それは両者の単なる橋渡しということでは達成できないであろう。二つの理論が概念的に両立しないように見えても、もし究極的にそれらが正しく、かつ具体的であれば、橋渡しの必要はない。つまりそうなれば二つはまさにアイデンティカルであるであろうからである。

### 刺激反応学習理論の知覚論としての評価

学習の認知的理論が知覚現象の一般的理論になれないことについては既に論じた。そのような知覚理論は学習の役割を説明しないし、過去経験の重要性を無視している場合がある。定量的法則性のないこともしばしば批判される。それらが学習や知覚のある種のグラフ的な構造的なモデルを提供するという点で、刺激反応理論より少しはましであるにしても、そのモデルなるものが多くの場合、具体的なレファランス、説明力、一般性、あるいは事実との一致性がない。

他方、Solomon-Howes に対する知覚心理学者の「おののき」にも拘わらず、刺激反応理論が知覚の問題を全部背負いこむ程に一般的であるとも思えない。客観的データに比べて現象的体験は科学的記述として不満足であるとはいえ、それは依然として科学者の記述すべき正当な課題である。たとえば質的

体験について、われわれは何かをしなければならぬ。また知覚恒常性、知覚的セット、関係系の変位などについて、果たしてS-R理論にはこれを論じるだけのフレキシブルな記述概念があるであろうか。Hullにおける求心性神経交互作用、刺激複合、部分的目標期待反応などはかなり有望であるが、認知、知覚体制、知覚選択性における運動系要素、意味ゲシタルトなどの微妙なニュアンスをカバーできるかどうか。数量的関数以外にはほとんど内包性を持たない概念が、知覚における統合的関係の非定量的特性を説明できるであろうか。知覚理論は刺激反応や、頻度とか強化とか反応ポテンシャルとかだけの方法論では失われてしまう多くの現象を、確かに包含しているのである。

知覚に関する限り刺激反応理論の限界はさらにその方法の本質にある。知覚理論たるべきものは、外的事実だけでなく内的なるものをも含めて、すべてのアグリゲートの要素の一つのコヒーレントかつダイナミックな図式に集成しなくてはならない。刺激反応理論は本質的に巨視的であるがゆえに、こうした要請はしない。媒介変数は論理的な構成概念にすぎず、有機体の内的事象に言及することはない。変数操作は純粋に量的である。思弁にたいして警戒的であるべき刺激反応理論であるにも拘わらず、媒介変数には何かフィクション的なものがある。厳密に言うならば実質的な意味において変数(variable-これは形容詞である!)というものはない。媒介変数というのは、たとえば一人の背の高い男を指すのに、there is an intervening "tall" というようなことに等しい。tall という用語が何を意味するかを知ることが明らかに必要である。そのためにはその男をdenoteできなくてはならないし、manとはなにかを知らねばならない。

「何もの」かdenotableなものにencounterしなければ媒介変数は何ら説明的な意義を持たない。そうでなければそれは単にその「何もの」かの量的次元ないし属性にしかすぎない。あるいは他のデータから計算された数の抽象的な集合にすぎない。

Hullの理論は畏敬にたるものであり、その陳述は厳密、その量的予測性はまさに一つの達成である。公平にみてHullは生理学的概念にも気を使い、媒介変数のdenotableな対件の必要性を説いている。それにも拘わらず、彼が知覚の定性的な側面にも等

しく考慮をはらうことなく、non-denotationalな概念だけで押し通そうとするのをここでは批判するのである。本来ならばこれはもっと十分に議論を尽くさなければならない問題である。本論における批判は確かに短すぎ、いささかドグマチックでもある。しかし、知覚における理論の対立に、われわれがこのように困っているのも、必要にして十分な理論形式がいまだに一つもないという現実から来ているという認識の一助にはなると思う。

## 引用文献

- Allport, F. H. 1955 *Theories of perception and the concept of structure*. New York: Wiley.
- 金子隆芳 1970 Allportの知覚諸学説批判とその構造学説 東京教育大学教育学部紀要, 16, 63-69.
- 金子隆芳 1972 知覚論における形態主義——Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(続) 東京教育大学教育学部紀要, 18, 91-98.
- 金子隆芳 1974 知覚論における要素連合主義——Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(続) 東京教育大学教育学部紀要, 20, 61-66.
- 金子隆芳 1976 知覚論における機能主義——Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(続) 東京教育大学教育学部紀要, 22, 101-108.
- 金子隆芳 1979 知覚における運動的要素——Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(5) 筑波大学心理学研究, 1, 3-10.
- 金子隆芳 1980 知覚における意味の問題——Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(6) 筑波大学心理学研究2, 1-11.
- 金子隆芳 1983 知覚の指向状態説——Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(7) 筑波大学心理学研究, 5, 1-10.
- 金子隆芳 1984 知覚の仮説理論——Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(8) 筑波大学心理学研究, 6, 1-8.
- 金子隆芳 1985 知覚のセット・ダイナミクス——Allportの知覚諸学説批判とその構造学説(9) 筑波大学心理学研究, 7, 1-6.